
古代アメリカ学会会報

第 40 号記念号



ペルー、アンカシュ県のインカ道 ©大谷博則

目次

◆特集：学会 20 周年を振り返って	1	◆会員の受賞	23
◆特集：世界遺産の現在	6	◆第 10 期の新役員紹介（増員分）	24
◆第 6 回東日本部会研究懇談会の報告	20	◆事務局からのお知らせ	24
◆学会協力事業の報告	21	◆編集後記	27

2016 年 7 月

*本稿掲載文・写真の無断転載・複製を禁じます。

古代アメリカ学会は、今年 6 月 22 日に創立 20 周年を迎えました。今号では、学会 20 周年と会報第 40 号の発行を記念して、創立当初を振り返る特集を組みました。創立当時の会員でもある関雄二現会長、初代会長である大貫良夫会員、そして初代表幹事を務められ、学会の立ち上げに尽力された中村誠一会員のお三方に、創立にあたってのいきさつやご苦労、そして今後の展望まで綴っていただきました。当時の状況を振り返りながら、今後の本学会の活動のあり方、方向性等についても思いを巡らせていただければと思います。

●学会創立 20 周年に寄せて

関雄二（現会長）

2015 年、古代アメリカ学会は創立 20 年目の年を迎えました。学会員数もさほど多くはなく、大きな行事をとりおこなうことはできませんでしたが、12 月に東京大学で開かれた研究大会は、学会の歴史で初めて 2 日間にわたる発表で埋め尽くされるほど盛況を極めました。

20 年前、中村誠一会員の発案で、私たち中堅やベテランの研究者が支援する形で学会を発足させた頃、毎年の研究大会での発表が果たして集まるのか悩み、調査の終わったばかりの同僚に声をかけ、指導学生に修士論文の概要を発表させることでなんとか形を整えたことを思うと隔世の感を禁じ得ません。

こうした学会の発展は、ひとえに学会員の精進により、アメリカ大陸の考古学の専攻を希望する学生を引き受ける大学機関が全国各地に生まれてきたことによるものでしょう。マスメディアやネット上にあふれるアメリカ大陸の文化遺産の情報に触れ、心をときめかせて研究を志す若者に多くの選択肢が生まれたことは歓迎すべきことです。

また昨今の教育行政では、若手研究者の育成に重点が置かれ、研究費、調査費、奨学金など厚い支援の手が差し伸べられていることも若手研究者が誕生する背景にあると思われます。狭く限られた進路の前に断念せずとも、熱意を持って研究に打ち込むことができる環境が整ってきたことは間違いありません。

しかしながら、こうした若手研究者が増えれば増えるほど問題となるのが、その出口としての職です。目に付く公募はどこもかしこも任期付きのポストばかりで、給与は安く、非常勤講師の掛け持ちでなんとか生活を支えている方々が多いのではないのでしょうか。この状況は教員である私にとっても悩みの種であり、機会がある毎に常勤雇用の増加を訴え

てきました。今年から始まった文部科学省の卓越研究員事業もこの状況を打破する一つの方策ではありますが、その規模はあまりに小さく効果は限定的と言わざるを得ません。

では学会として何ができるのでしょうか。大学運営の予算削減に伴う雇用の悪化、あるいは人文科学系の統合縮小などの大きなうねりの前では限られてはいますが、ともかくも研究を地道に積み上げていく作業を愚直なまでに続けていくことは外せないでしょう。学問の名称変更が大学改革であるかのような風潮の中で、少なくとも学会だけは学問の体系の継続と批判的発展を忘れてはなりません。

ただしこの点だけに固執していても事態がよくなるわけではありません。これは私見ではありますが、学問を守り発展させる術として、周辺領域との連携を進めることが鍵を握っていると考えています。アメリカ大陸の考古学にしっかりと根を下ろしながら、世界各地の考古学研究との連携をとる、あるいは文化遺産の国際協力分野にも関心を広げる、といったような作業でしょうか。こうした努力は逆に根幹にある学問を相対化することにもつながりますし、より広い視座を持った研究者が生まれる可能性すら感じます。

そして現在、役員の方々に討議していただいている中等教育への学会の関わり方も大いに参考になります。教育を通じて研究の楽しさを伝え、研究を支えてくれるファンを増やすばかりでなく、研究自体が異文化理解、多文化共生という現代社会の課題に迫る手段の一つであることを訴えていくことも可能になるからです。

確かに学会は学会員のもので、同時に、世界そして地球の上で活動する組織でもあります。学会員個人が、広く大きな視座を持ち続け、よりよき未来を構築するために社会に発言していけば、事態の打開につながると信じています。

●古代アメリカ学会の誕生

大貫良夫（初代会長）

泉靖一先生がペルーで天野芳太郎氏に出会ったのが1956年、そのとき先生は初めて古代アンデス文明の遺跡と遺物に触れた。そしてその後の研究の対象にする決意をして、半年ほどの短い間ながらハーバード大学のゴードン・R・ウィリーのセミナーに学び、1958年東京大学アンデス地帯学術調査団を組織してしまった。戦後わずか13年、復興もまだ大して進まぬ頃の日本で、わずか2年である大調査団ができて、トヨタ自動車のジープ5台を連ねてペルーの海岸砂漠から峻険な山岳地帯を歩き回ったというのだから、まったく驚くほかない。ペルーの山間の地方都市では「トヨタ」という名前すら知られていなかったし、かく言う私も日本で自家用車を持つことなど想像さえしたことがなかった。1960年にペルーに着いてバナナが安いのに感激して、毎日10本ものバナナを食べるといふ団員もいた。食事の豊富なこと、中華料理の贅沢なこと、自家用車や電気冷蔵庫や電気洗濯機そして大型のテレビは普通の家庭では持っているのがあたり前のペルーであった。そんな時代によく未知の南米に出かけて、ほとんど先行研究を垣間見ることのないままに遺跡発掘をして、しかも当時の定説を覆してしまう成果を上げることができたものである。

日本人のアンデス研究者は東大調査団以外にはいなかった。研究会や勉強会などを継続的に開くことなどなかった。調査の年（1960年と63年）に朝の7時から9時まで研究会を毎週火曜日に開いたことがあったくらいである。1964年私は半年ばかり米国に留学して、初めてペルー以外の新大陸先史文化の遺物を実見した。そしてメキシコの国立人類学博物館の開館式とテオティワカン第1次復元竣工式に立ち会う幸運に恵まれた。それから「1日5ドルメキシコ旅行」とかいう本を頼りに、バスでオアハカ、チアパス、テワンテペク地峡からラ・ベンタ、汽車でパレンケ、最後にチチェン、ウシュマルなどのマヤ遺跡を見て歩いた。おかげでアンデスだけでなくメソアメリカの一端に触れることができた。

もう一つ脱線をゆるしてもらおう。メキシコからの帰路、またもやバスで合衆国に入り、プエブロ・ボニートやメサ・ベルデなど北米南西部の遺跡も

いくつか見物した。こうした旅行での見聞は私の視野を大きく広げたと思う。またその前年の1963年にはワスコから東の熱帯雨林地帯へ数日間をかけて、先住民の村や独特の彩色土器を目にし、ある洞窟では床に散らばる古そうな土器片を拾ったりして、アンデス高地に隣接する熱帯雨林という環境とそこの先住民文化に直接触れたことも、のちのちアンデス形成期の文化をみる視点に影響を与えたと思う。しかしこの経験や感想を語っても日本で相手をしてくれる仲間はまだいなかった。

真の意味で研究仲間ができたのは1979年のカハマルカ調査からである。加藤泰建、丑野毅、松本亮三、関雄二、そして私が寺田和夫先生のもとワカロマ発掘を始めてからである。このメンバーで1985年まで北部ペルーの考古学研究を進めていたが、1988年からは北ペルーのクントゥル・ワシ遺跡の発掘が意外な展開を見せて、新しい若手が増えていった。井口欣也、坂井正人、猪俣健、長谷川悦夫、徳江佐和子などがペルーに渡った。さらにその後渡部森哉、鶴見英成、村上達也、芝田幸一郎など大学院生として加わって今日新大陸先史学の先端を切る錚々たる研究者になっていった。こうして東京大学の文化人類学大学院を中心に勉強会がもたれ、いま正確な年代が思い出せないが、「プラタフォルマ研究会」と称するようになったと思う。

こうした動きとは別に京都のほうで大井邦明がメキシコ考古学研究を進め教鞭もとっていた。また金沢大学でもマヤに興味を持つ若手が育ちつつあったが、お互いの交流はなかった。

そこへホンデュラスから考古学プロジェクトへの協力要請があつて、1984年からラ・エントラータ考古学プロジェクトが発足し、第1陣として金沢大学に学んだ中村誠一と東京大学の猪俣健が日本人にとっては全く知識のなかったホンデュラスのマヤ遺跡に取り組むことになった。二人に続いてその後も若い学徒が加わり、今日のマヤ研究の中心勢力になった。猪俣はこの後でクントゥル・ワシ第1回目の発掘に参加し、その後アメリカの大学に留学した。私は1991年と93年にこのプロジェクトの評価を依頼されて、ラ・エントラータを訪れ、そこで中村、青山和夫、長谷川悦夫、寺崎秀一郎などから説明を受けた。メソアメリカ研究者が輩出するであろうという予感がした。

さらに個人で研究を深めていた人もいた。八杉

佳穂は1982年に「マヤ文字を解く」と書物を著し、マヤに関心のある日本人に大きな衝撃を与えた。伊藤伸幸は名古屋大学にいてグアテマラそしてエル・サルバドルで調査と研究を行っていた。アメリカの大学にいて独自にテオティワカンの発掘を進めていた杉山三郎もやがて日本の研究者たちに知られていった。

これまた正確な日時にはさかのぼれないが、1994年から95年にかけての頃、東京大学にいた私のところへ中村誠一氏がやってきて、アンデスからメソアメリカまでにまたがって日本の研究者が集まれる研究会を組織したいという。喜んで協力しようということではあったが、言い出しっぺの中村氏に具体的な作業はお任せした。こうして1995年11月18日に東大文化人類学教室の講義室で新研究会設立委員会が開かれた。東大の大学院生も準備の仕事を手伝った。

こうして1996年6月22日に新研究会が正式に発足した。その総会において、「古代アメリカ研究会」という名称が採択され、会則そして役員組織が承認された。大貫（会長）、中村（代表幹事）、長谷川（事務幹事）、柳沢健司・多々良穰（監査委員）が最初の役員であった。翌97年の5月の総会では徳江、高山智博、馬瀬智光、関雄二が運営委員などの役員に就任した。また当初から杓谷茂樹も準備作業に携わっていた。

1998年5月17日第3回の総会が開かれた。3年前の40名そここの会員は74名を超えるに至った。そいつに会報ではなくて「会誌」を出そうということになった。名前は どうする、デザインは どうする、寄稿の条件は どうするなど、役員会で議論して決めねばならないことがたくさんあった。こうしてその年に「古代アメリカ」（*América Antigua*）が生まれた。創刊号をお持ちの方には蛇足だけれども、あえてその時に私が書いた序文の一部をここに載せたい。

「古代アメリカの研究に志し、また古代アメリカの文化と歴史にさまざまな視点から関心を持つ人たちが集まって、研究会を作ろうと数年来準備を重ねた末に誕生したのが古代アメリカ研究会である。会員はまだ100名に満たない小さな会である。また、若い人たちが多い会である。

しかし、若さは力である。活力である。向こう見ずの若気と言われようとも、真摯にして前向き

の姿勢とその背後にあるエネルギーは、年寄りには持てないものである。その姿勢とエネルギーをもって私はモラルと言いたい。

何事も草創の時代はこのモラルが高揚している。逆に言えば、高揚したモラルがあれば、それを共有する人たちの成そうとしている仕事は成功する。古代アメリカ研究会がどこまでモラルを高め続けられるか、それは会員の気持ち次第である。

（中略）古代アメリカ研究が大きく育つことに役に立つならば微力ながらお手伝いしようと会長をお引き受けした次第である。

大きく育つとは単に会員の数が増えることとは違う。ひとつには会員の研究が国際的なレベルで評価されるような成果を生み出すことである。幸いにして少なからぬ若い会員が現地調査や海外での研究の経験を有しており、外国の研究者との交流を深めている。日本の中だけに顔を向けているのではない。この点はたいへんに心強い思いがする。」

その後、研究会の名称は「古代アメリカ学会」に変わった。その頃から今までのことは多くの会員の知るところであり、後述もされるであろう。また、会誌の内容も一段と充実し、この分野では日本語だけで出すのがもったいないくらいの高いレベルである。会誌の規定では英語やスペイン語でも寄稿できるけれども、多くの日本人にも読んでもらいたいので日本語抜きにはできないが。当時の若手研究者はいまや中堅から指導的地位について研究を前進させ深化させている。国際学会には必ず誰かが発表をしている。

かくして古代アメリカ学会は誕生して20年、立派な成人となって世界を前に風を切って歩んでいる。日本で考古学や文化人類学の基礎を学んだことが強みになっていることは間違いない。何よりも発掘のプロセスとデータの正確さは誇ってよいと思う。上に上げた名前の研究者の後にも若い人たちがメソアメリカからアンデスの各地で毎年のように何かしら新しい知見を得る活動をしている。この人たちの研究職の場が広がってくれることを願うばかりである。私は嫌だし信用もしないが、あの大学ランキングでの地位上昇にわが国の新大陸考古学研究者は今後大いに貢献することだろう。

●古代アメリカ学会の過去、現在、未来

中村誠一（初代代表幹事）

本稿では、古代アメリカ学会の会報の発行が 40 回に到達した記念号の発刊にあたり、また同学会が前身である古代アメリカ研究会の設立より 20 年を迎えた節目の年にあたり、本会設立に携わった一人として当時のことを振り返りながら設立当初のいきさつを記します。また、次世代の方々に将来にわたって古代アメリカ学会を発展させてもらうべく今後の活動への簡単な提言をさせていただきます。

1994年に2期11年にわたって指揮したホンジュラス、ラ・エントラダ地域での JICA と現地政府機関との合同考古学プロジェクトから帰国して気が付いたのは、日本では中南米考古学に関する全国的な研究会や学会がないことでした。当時、国内には中南米考古学/先史学に関する独自の 3 つの研究組織が存在していました。一つは、長年ペルーの調査を行っていた東大のアンデス文明調査団であり、本会の大貫先生、加藤先生、関先生らが、調査団のメンバー間でプラタフォルマ研究会と呼ばれる研究会を行っておられたと思います。二つ目は、90年代前半にグアテマラのカミナルフユ遺跡でプロジェクトを実施された故大井邦明先生の主催されていた研究会であり、会員の伊藤伸幸氏、柴田潮音氏、南博史氏らが京都を中心に活動しておられたと思います。そして三つ目が金沢大学の考古学専攻出身者が組織していた「中南米考古学研究会」であり、会員の馬瀬智光氏や多々良穰氏が主催していました。

筆者は金沢大学の考古学専攻出身であったため、帰国後すぐに三つ目のグループの研究会に関係するようになり、ラ・エントラダ考古学プロジェクトに参加した会員の長谷川悦夫氏らにも声をかけて、中南米考古学研究会のメンバーを中心に新研究会の設立に動き出しました。この 3 つの研究会は相互に排他的なものではありませんでしたが、研究会相互の間に全く交流がなかったことも事実で、将来的な展望を考えると中南米全体を論じられる全国組織の専門的な研究会、学会組織が必要であると感じたのです。

もちろん、大規模な現地調査を行い、経験豊富な大学教員を中核に行われていた上記二つの研究会と現地経験もあまりない草莽の若手の人たちが行政や民間で働いていた合間を縫って行っていた中

南米考古学研究会では、レベル自体が異なり一緒にするなといわれるかもしれません。しかし本会の設立時に連絡係や調整係を引き受け、走り回って難しい実務仕事をこなしていったのはこの研究会に属していた馬瀬、多々良、杓谷、長谷川といった諸氏でした。



写真 1 中南米考古学研究会が発刊していた雑誌

現在の会員の皆さんは、自身の研究を同分野の査読制専門雑誌である『古代アメリカ』へ投稿できますし、事実、若手の会員の皆さんは、そのようにして「学術業績」を積み重ねて来ています。そのため特に不便は感じていないかもしれませんが、当時は、日本での中南米考古学/先史学専攻者には査読制専門雑誌での出版一つをとっていても狭き門でした。分野から探そうとすると日本考古学系の雑誌がいくつか、分野を広げれば『民族学研究』『ラテンアメリカ研究年報』というような雑誌がいくつかありましたが、編集委員会が中南米考古学の論考にほとんど興味を示してくれませんでした。もちろん、それらの査読制専門雑誌への掲載も不可能ではありませんでしたが、「内容が雑誌にそぐわない」というコメントが編集者からかえって来たこともしばしばありました。このような状況を変えるためにも、中南米考古学/先史学を専門とする特に若手の人たちが、査読者の指導を受けながら出版できる我々自身の専門雑誌の発刊が必要であったと思います。

こうして、中南米考古学研究会メンバーとともに 3 つの研究会の統合に動き始めました。我々は、まず新大陸文化研究協議会（仮称）なるものを立ち上げて動き始めました（多々良 1995）。まだ正式な組織もありませんでしたから、みな自費で動いて集まっていました。東大アンデス文明調査団の先生方の

協力を得て、アンケートにより新研究会設立の趣旨を述べ参加希望者を募る形をとって、新研究会＝古代アメリカ文化研究会（仮称）を1995年に組織し11月18日に東京大学教養学部で研究発表大会を行いました。その後、杓谷氏を中心として会則（案）の整備が行われていき、会の目指す研究対象時期の中核をいわゆる「先コロンブス期」におくことや、研究者を目指す若手の人々に研究発表や論考出版の機会を与える会誌を発行することなどを決めていきました。正式な名称が古代アメリカ研究会と定まり、大貫先生を初代会長にお迎えし、我が国の中南米考古学/先史学およびその関連分野の研究を合同で行う組織として正式に発足したのは1996年のことです。1997年には会報第一号が発行され、翌1998年には関・現会長の並々ならぬ献身のおかげで『古代アメリカ』創刊号の出版にこぎつけました。大貫先生が創刊号の序文で書かれているように、日本における古代アメリカ研究の真のプラタフォルマが出来たのです（大貫1998）。数年後には、大井邦明先生の研究会の主力メンバーも正式に会員に加わり、3つが統合され現在の形になりました。

私自身は、研究会が設立され軌道に乗り始めてすぐ、1999年3月にホンジュラスのコパン遺跡へ赴任してしまい、その後長い間、本会の活動からは離れざるをえませんでした。現地で活動していた10年以上の間にも、本学会の活動や発展の様子を耳にはしてはいましたが、現在のように会報への寄稿、研究大会での発表という形で再度、学会活動に関わるようになったのは2010年からのことです。

私が現地で活動している間に、本会は正式に研究会から学会へと昇格し、会員数も設立時の4倍近くに増え、古代アメリカの考古学・先史学および関連分野の我が国における唯一の専門学会として確固たる地位を築いたのはみなさんご承知のとおりです。その過程が決して平坦なものではなかったことは容易に想像できますので、会の活動を大きく発展させた、現在の古代アメリカ学会の中核をなしている方々に心から敬意を表したいと思います。これからは、現在、会の中核となって動いている30代～40代半ばの人たちが議論を重ね、会の方向性を定めて、年に1～2度の研究大会や研究懇談会の開催、会誌や会報の発行というような日本の学会のステレオタイプの活動にとらわれることなく、斬新な企画と実行力で新しい時代の学問潮流を切り拓く学会活動を展開してもらいたいと期待しています。

今回の会報におけるこの特集を契機にして、古代アメリカ学会に関する設立当初からの会報や研究発表大会等の資料を整理しきちんと次世代に残しておくことの重要性を再認識しました。現事務局には、お手数ですが、是非データベースを作って継承していただきたいと思います。また発足以来20年という区切りの時間が経ったことで、このあたりで一度、発足以来の流れを振り返りながら、現地ではなく日本で古代アメリカの研究をすることの目的や意義を、学会の現状を踏まえながら、もう一度、皆で考える機会を設けたらどうでしょうか。そろそろ日本語に加えて、ラテンアメリカ諸国の母国語であるスペイン語や世界共通語の英語でも論考を書いたり発表したりできるようにする時期かもしれません。こうした点を一度立ち止まって皆で議論しておくことが、おのずと本会の進む方向や改革の方向性を決めていく際に役立つことでしょう。

本会には、社会貢献など研究者の本業ではないので、出来ればご免こうむりたいと思っている研究者もいるようです。しかし時代の進展とともに、従来型の考古学や先史学が属する人文・社会科学に対して国や社会が求めているものも変化しており、科研費のような公的資金を使った研究成果にも国民の厳しい目が注がれるようになって来ています。この意味で、すでにその萌芽が出ていますが、若手の研究者には狭義の専門分野における調査研究論考の発表や出版だけにとどめるのではなく、もう少し領域横断的・分野融合的な、例えば文化資源学、パブリック考古学といった分野での研究にも意識的に視点を広げていただきたいと思います。本会の中米研究者と南米研究者の間には、研究者としての形成過程の違いも見られますが、次世代の研究者がお互いに交流を重ね切磋琢磨して学会の影響力を強め、社会への発言力を高めていってほしいと願っています。

参考文献

大貫良夫

1998 「創刊号の発刊に寄せて」『古代アメリカ』創刊号1～2頁。

多々良穰

1995 「中南米考古学研究会の軌跡と展望」『中南米考古学研究会会誌』第5号1～2頁。

会報第 40 号の記念となる今号では、特集を 2 本立てにしました。2 本目の特集は、ユネスコ世界遺産として登録された考古学遺跡の現在について、会員の方々に綴っていただきました。現在ユネスコ世界遺産の登録件数は 1031 件に上り（2016 年 7 月 1 日現在）、本学会の対象となる古代アメリカに関するものも多くあります。ユネスコ世界遺産は、それを抱える地域住民のアイデンティティ創出や、観光振興による経済発展への期待など、単に「価値を人類で共有する」というリスト登録のみにとどまらない影響力を持っています。またそれに伴って、保存や管理運営、それらを取り巻く人々の関係性などの様々な課題も生じています。本特集に寄せられた 7 本の寄稿を通じて、そのような「世界遺産の現在」にも目を向けてみてください。

●世界遺産チチェン・イツァの「観光イメージ」の適切なコントロールに向けて

杓谷茂樹（中部大学国際関係学部）

チチェン・イツァ遺跡公園の「囲い込み」

メキシコのチチェン・イツァ遺跡が世界遺産に登録されたのは 1988 年 12 月のこと。この頃には、カンクンが世界的なリゾートとしての地位を確立しており、ユカタン半島北部のこのマヤ遺跡にも世界中から観光客が押し寄せるようになってきていた。世界遺産の登録基準のうち、1) 人類の創造的天才の傑作を表現するもの、2) ある期間を通じて、または、ある文化圏において、建築、技術、記念碑的芸術、町並み計画、景観デザインの発展に関し、人類の価値の重要な交流を示すもの、3) 現存する、または、消滅した文化的伝統、または、少なくとも稀な証拠となるもの、という三要件を満たした登録であること、そして何より「先スペイン期の都市チチェン・イツァ（Pre-Hispanic City of Chichen-Itza）」というその登録名を見ても、当然のことながら、この世界遺産に期待されていたのは古代都市チチェン・イツァのイメージであった。

世界遺産登録後のチチェン・イツァ遺跡公園では、筆者が遺跡の「囲い込み」と呼ぶ公園整備が進められてきた。この「囲い込み」では主に 2 つの大きな作業が行われている。そのいずれもが「囲い」の中のイメージを純化しようとする行為であったといえるだろう。そのひとつは観光客のコントロールであった。すなわち公園内の戦士の神殿、ジャガーの神殿、カラコル、尼僧院、そしてエル・カスティージョといったチチェン・イツァを代表する建造物において、観光客が建造物に上ったり内部に立ち入ったりすることが徐々に禁止されていったのだ。そしてもうひとつが、公園内で商売をしていた地元の露店商たちの「囲い」の中からの排除であった。当初

は相当な反発もあったものの、多いときに 600 人ほどいた露店商たちは、結局公園の入口付近に設けられた民芸品市場に集められている。こうした整備事業には建造物の保護や転落事故防止という大義名分があったとはいえ、それまで建造物に群がっていた観光客やその周囲で商売していた露店商の姿をそこから遠ざけることで、古代都市チチェン・イツァのイメージに叶った遺跡の景観を意図的に作り出そうとしたのである。



チチェン・イツァの世界遺産のプレートと地元露店商
（筆者撮影）

このように世界遺産登録以降、チチェン・イツァ遺跡公園内で行われてきた古代都市チチェン・イツァのイメージの純化であるが、2000 年代に入ると様相は少しずつ変化していった。リヴィエラ・マヤ地域の開発の進展とともに、遺跡公園の訪問者数がさらに増加してきたことに反応するかの様に、次第に観光客がメディアを通して事前に獲得し、期待して持ち込んでくる「マヤ文明イメージ」に応えたテーマパーク的な遺跡公園作りという側面を強めていったのだ。それはマヤ地域とは直接関係のない外部で自由に「マヤ文明イメージ」を生産して消費に供するメディアや観光業界などが、働きかけを行う

ことにより進んできたことであり、ユカタン北部地域の観光規模が膨らめば膨らむほどその傾向が強くなっていったといえる。そして2007年にチチェン・イツァが「新・世界の七不思議」に選ばれたことで、そのあり方は決定的なものとなった。

そうした雰囲気は、例えば毎年春分の日と秋分の日エル・カステージョで見られる「ククルカンの降臨」を前にした観光客がみせる熱狂ぶりや、2012年12月21日の「世界が滅亡する日」の大騒ぎの様子などのように、時として極端なお祭り騒ぎを生み出すこともある。そして、そのようなことすら次第にチチェン・イツァ遺跡公園の日常の領域に近づいてくるのだ。従来から行われてきた「光と音のショー」は、2014年末にプロジェクション・マッピングの手法によって”Las Noches de Kukulcán”というショーにリニューアルし、毎晩そうした言説やイメージを再生産している。元々そこにあるピラミッドにレーザー光線をあてて、自由に「マヤ文明イメージ」を描き出すこのイベントは、まさに現在のチチェン・イツァ遺跡公園のあり方を象徴している。



Las Noches de Kukulcán (筆者撮影)

ただし、筆者がかねてより述べてきたように、世界遺産である前に、「遺跡」というものは現代社会を生きている存在である。いまを生きている先住民マヤでもある地元住民たちを外に排除して、「囲い」の中を古代のイメージで固定しようとするなど所詮無理なことだったのだ。その無理が2004年末に起こり現在まで続く地元露店商不法侵入問題という形になって現れたと考えることもできるだろう。

地元露店商の不法侵入問題と観光イメージ

2015年12月、まさにユカタン地方の観光がハイ

シーズンのピークにさしかかろうとしていた頃に、露店商の不法侵入問題を巡って緊張感が高まる出来事が起こっている。公園内で商売している数百人の露店商の存在のせいでチチェン・イツァが「新・世界の七不思議」から外される危機にあると、メキシコ旅行代理店協会 (AMAV) のカンクン代表のセルヒオ・ゴンサレス・ルビエラ氏が語ったことが新聞に掲載されたのを事の発端として、公園内の露店商への批判とともに、キンタナ・ロー州、ユカタン州双方の観光業界からユカタン州政府に対して、この問題の早急な解決が声高に要求されたのである。

これに対し、批判の矢面に晒された露店商側も、最大の組合組織であるヌエバ・ククルカンが、顧問弁護士を通じて、スイスの新世界の七不思議財団に対して、自分たちの存在が登録から外される原因になっていないことの確認を求め、ユカタン州政府観光局にも協議を要求するなど積極的な動きを見せたことが報道されており、ここにステークホルダー間の緊張が一気に高まったのであった。

こうした状況の中で、州政府観光局は、露店商寄りのスタンスをとりつつも、あえて特段の対応をとらず静観するという態度をとり、結局事態はこれまでと変わらぬまま表向きは沈静化して現在に至っている。チチェン・イツァ遺跡公園においては、観光業界からの発言を発端に、露店商側が反応してステークホルダー間の緊張が高まるということ自体は、これまでもしばしば起こってきたことであり、今回の行政側の対応も従来と変わらないものではあった。

だが、ここで筆者が指摘したいのは、今回も含め観光業界側がこの問題を取りざたする際に必ず持ち出すのが、チチェン・イツァ遺跡公園の「観光イメージの悪化」であることである。彼らが言う「観光イメージ」とは、「古代都市チチェン・イツァ」をモチーフに観光客が期待し、そこに持ち込んでくる（と観光業界が考える）イメージでしかない。すでに、それは世界遺産登録以降に純化してきた「先スペイン期の都市チチェン・イツァ」のイメージともずれてきているものであり、この「遺跡」という文化資源を通して観光客に体験させ、見せていくべきマヤ文明のイメージと、この「観光イメージ」には明らかに乖離が生じている。

つまるところ、チチェン・イツァ遺跡公園で起こっていることは、関与する様々なステークホルダーによる、現代人が勝手に想像し、勝手に期待する「マ

「マヤ文明イメージ」の再創造にすぎない。そして、公園内の「観光イメージ」に関して言えば、筆者には不法侵入している地元露店商も観光業界も共犯関係にあるようにしか見えない。地元露店商の存在が遺跡のイメージを損なっているというこの観光業界側からのアピールも、単に自分たちが志向する再創造の方向性と違う事態が地元露店商たちによって引き起こされていることを云々しているだけに他ならないのだ。

世界遺産としてのチチェン・イツァの適切なイメージ創りに向けて

そもそも世界遺産というものは、人類が共有すべき「顕著な普遍的価値」を持つ物件をリストにのせ、世界共通の宝としてこれをみんなで守っていきましょうという考えのもとに選ばれるものであって、すべての人類はその価値を尊重し、それが失われることのないようにこれと付き合っていかなければならないはずだ。

だが現実には、世界遺産登録と観光振興が分かちがたく語られるケースは少なくない。だから、文化遺産において保全と観光のバランスをどう取っていくかというテーマが、近年さかんに議論されている非常に大きな問題となっているわけだ。ましてや、それが世界遺産ともなれば、このバランスが崩れがちになることも我々はよく知っている。巨大なマストゥーリズム状況の一角を占めるチチェン・イツァ遺跡公園においても、とてもこのバランスが適切にとれているとはいいたい中で、「マヤ文明イメージ」の再創造が日々繰り返されているわけだが、ここで我々が問うていかねばならないのは、結局はその再創造のあり方なのである。世界遺産となったとはいえ、いや世界遺産だからこそ、チチェン・イツァのイメージは適切な形でコントロールされなければならない。

ICOMOS が 1999 年に制定した「国際文化観光憲章」では、その基本原則のひとつに「ホスト社会と先住民族コミュニティの関与」という項目が設けられ、a) ホストコミュニティ、b) 遺産の法的所有者、c) 土地あるいは重要な場所について伝統的な権利と責任を有する先住民族の三者が、文化遺産の保護と観光のプランニングに関与すべきであると明記されている。

長くマストゥーリズム状況の真ん中に存在してきたチチェン・イツァが、現状でこの「憲章」の目指

す形とはほど遠い有り様であるのはやむを得まい。だが、この遺跡公園を巡ってステークホルダー間の緊張関係が高まっている現在の状況を、逆に様々な既得権益を整理・再構築してチチェン・イツァの遺跡観光の今後のあり方を新たに模索していくためのいい機会として捉えることはできないものだろうか。

そうとなれば、この地域で大きな力を持つ観光業界に、行政側から州政府観光局や文化財行政を担う INAH が対峙する状況に、公園内の露店商たちも含めたホストコミュニティの構成員も同じテーブルにつく形で、遺跡観光のあり方の再構築が求められていかねばならない。だが、そこで何よりも重要なことは、チチェン・イツァのイメージを適切な形でコントロールしていくためには、まずは文化遺産の価値に責任を持つべき INAH がその議論で中心的な役割を果たしていかなければならないということ、そしてマヤ文明に関わってきた考古学者やその周辺分野の研究者がさらなる積極的な発信をしてゆくべきだということであろう。

●世界遺産「コパンのマヤ遺跡」の現在

五木田まきは（金沢大学人間社会環境研究科）

はじめに

筆者は、博士前期課程・後期課程を通じて、ホンジュラス共和国のコパンにおいて、調査研究を行う機会に恵まれた。現在も、コパン遺跡への拠点となるコパルルイナス市において、地域住民を巻き込んだ文化資源マネジメント研究に取り組んでいる。今回の世界遺産特集にあたり、世界遺産コパンのマヤ遺跡の現状と課題を紹介したい。

コパン遺跡は、ホンジュラス共和国西部・コパン県コパルルイナス市にあり、隣国グアテマラとの国境からも 12 キロほどの場所に位置するマヤ文明の代表的遺跡の一つである。「高浮き彫り」という精緻で立体的な彫刻様式で掘られた石造彫刻は見事の一言であり、マヤ地域で最長の 2200 ものマヤ文字テキストが刻まれた「神聖文字の階段」と呼ばれる 26 号神殿の正面階段は、考古学者でなくとも誰もが一度はテレビや雑誌で見かけたことがあるだろう。こうした古典期マヤ文明の文化の極みとも呼べる高度な文化・芸術を有し、「マヤ遺跡の中でもっとも美しい」とも称されることの多いコパン遺跡は、1980 年にユネスコ世界文化遺産に登録された。



写真1 神聖文字の階段。2200字はマヤ地域最長のマヤ文字テキスト

コパンのマヤ遺跡の現状

コパン遺跡はコパンルイナス市の中心地から1キロほどの距離に位置し、町を縦横無尽に走る三輪タクシーに乗って5分もせずに到着する。観光客用の遊歩道を歩いても15分程度でたどり着く。

遺跡ガイドが観光客を待ち受ける駐車場を抜けると、左手にビジターセンターがある。ここでは、往時のコパン中心グループを再現した立体模型を中央に、公園を管理する国立人類学歴史学研究所（以下“研究所”と略記）の公園オフィスやチケット売場、コパンの略史や代表的建造物・歴代のプロジェクトによる数々の発見を紹介するパネル展示室、トイレなどがあり、訪問者は遺跡探訪へ向かう準備を整える。

遺跡中心部へと続く森の中では、公園で餌付けしているコンゴウインコを見ることができる。遺跡の中心グループは、北に石碑の立ち並ぶ大広場、南にアクロポリスと大別され、その中間に球技場が位置している。丁寧に管理された芝生が美しい大広場に立ち並ぶ石碑には保存のための屋根がかけられ、神聖文字の階段を有する26号神殿など上部への登頂が禁止されている建造物も多い。観光客は大広場とアクロポリスを隔てる11号神殿を回り、祭壇Qと16号神殿のある西広場を抜け、アクロポリス中心の東広場へと回るルートを通ることが多い。東広場には発掘調査で掘られたトンネルを利用した見学ルートがあり、神殿内部に隠された建造物を見ることができ、一時の考古学者気分が味わえると人気を博している。



図1 コパン遺跡中心部（中村 2007 地図2）

課題

国内有数の観光地として国内外から年間10～15万人もの観光客が押し寄せ、安定した入場料収入を研究所に提供しているコパン遺跡であるが、様々な課題を抱えている。詳細な課題分析は最新のマネジメントプランに詳述されているため、ここでは遺跡保存そして地域住民との関係性という2つの側面について言及するに留める。

まず遺跡の保存について、コパン遺跡の建造物や石碑は凝灰岩で造られている。凝灰岩が持つ吸水性という特質は、雨水や太陽熱を多くその内部に吸収してしまう。そして、内部に侵入した水や熱によりクラックが生じているのである。ユネスコも2007年の報告書において、凝灰岩の性質による建造物の劣化を懸念しており、長期的総合的な管理プログラムの策定の重要性を述べている。

また、コパンにおいて数々の大発見をもたらした発掘では、重層建築の内部を調査するためにトンネル発掘が行われた。様々な調査団によるトンネルの総延長は約6000mにも及び、調査後の保存管理において課題を抱えている。6000mのうち1000mは埋め戻され、2000mは安定しているが、半分の3000mは不安定な状況にある。地域の年間降水量は増加しており、トンネル網への浸水も問題となっている。さらに、トンネル内を照らすライトの熱は、

高い湿度の環境と相まってしっくいレリーフへの菌の繁殖を引き起こしている。



写真2 アクロポリス東広場。建造物内部へのトンネル見学ルートは人気が高い

次に、地域住民との関係性について述べる。国の調査によると、コパンレイナス市中心部の人口は、2002年の約6500人から2015年には約8000人まで増加している。増えた人口をこれまでの居住区域のみでカバーすることは困難となり、居住区域の拡大が必要となり、未発掘の遺跡を含むエリアも開発の危機にさらされている。また、地域住民のエンパワーメントも不足している。このため、遺跡周辺に住む住民でさえ、考古学遺産の正しい価値を認識できておらず、石碑の真横でバーベキューをしたり、土地所有者が石を売却したりする事例も報告されている。

もちろん、研究所もこうした現状を傍観しているわけではない。解決に向けた中・長期的な対策を盛り込んだマネジメントプランが2013年に更新された。これによると、石材やトンネルの劣化については、その変化をモニタリングし、状態に則した管理方針の策定に取り組んでいる。また、地域住民に対しても小・中学校の遺跡見学のための体制づくりといった計画が盛り込まれており、保存管理・環境整備・価値評価・公共利用・調査研究といった視点からの課題分析と対策が計画されている。

こうした現状と課題を踏まえ、今後の自身の研究としては、博物館を装置として地域住民との共同活動を教育・観光という現場に連関させた活動を実践したいと考えている。こうした住民と協同した実践的研究活動を通じて、文化遺産による地域社会の活性化につなげていきたい。

参考文献

中村誠一

2007 『マヤ文明を掘る』日本放送出版協会。
Instituto Hondureño de Antropología e Historia
2013 *Sitio Maya de Copan Plan de Manejo*
2014-2020, IHAH.



写真3 アクロポリスから神聖文字の階段・球技場・大広場を臨む

●エルサルバドル共和国ホヤ・デ・セレン遺跡

市川彰（名古屋大学高等研究院文学研究科）

エルサルバドル共和国ラ・リベルタ県サン・フアン・オピコ市に位置するホヤ・デ・セレン遺跡は1993年に世界遺産に登録された。「中米のポンペイ」とも評され、紀元後7世紀頃^(註1)におきたロマ・カルデラ火山の噴火によって埋没し、先スペイン時代集落の日常生活が詳細に復元できることが登録の理由である。2016年5月時点でエルサルバドル唯一の世界遺産指定遺跡である。遺跡は、国立遺跡公園になっており、園内には博物館や民芸品店、売店があり、多くの観光客で賑わっている。

遺跡の詳細：よみがえる古代人の日常生活

ホヤ・デ・セレン遺跡は、1976年に小麦用のサイロ建設中にブルドーザーの運転手によって偶然発見された。その後、コロラド大学のP・シーツ氏が中心となって現在も調査が継続されている。

遺跡では、これまでに土製建造物11基が発掘されている。建造物の間取りや出土遺物から、住居、占いの館、集会所、倉庫、炊事小屋、蒸し風呂などさまざまな機能をもった建物が存在したことがわかっている。建物は木材で骨組みをつくり、それらを粘土で肉付けし、泥漆喰壁で仕上げられている。

住居内には寝床と考えられる「ベンチ」がある他、貯蔵用土器、マノ・メタテといった石製品などの日常生活に必要な道具一式が揃っている。このなかには、遠方からしか入手することのできない黒曜石や緑色石製品、海産貝に加えて、一般的に支配者層などの高位の人物の所有物と考えられている多彩色土器やカカオなどもみつかっている。つまり、農業を生活の中心とする庶民とはいえ、物質的に豊かな生活を営んでいたことが想像できる。

また一般的に古代メソアメリカの人々の主食といえば、トウモロコシが想像されるが、マニオックも主要な食材であったことが明らかになった点も無視できない。住居の周囲や集落からやや離れた場所で、畝状遺構が発見されているが、その大半でマニオックが検出されている。博物館には畝状遺構でみつかったピットから石膏で型取りされたマニオックが展示されているが、現代のマニオックと比較しても、長く太い。もちろんマニオック以外にも、フリホーレス、カボチャ、トウガラシ、アボガドなどがみつかっており、色々とりどりの食物が食卓に並んだことであろう。

集落には、占いや饗宴をおこなうための特殊な機能をもった建物もあった。占いの館は、入口に格子状の装飾が施された唯一の建物で、閉鎖的な内部空間が特徴的である。内壁には赤彩装飾や壁龕が施されている。部屋の内部では、土偶、鹿の角、海産貝、マメなどがみつかっており、こうした特殊道具のセット関係から占いの館と想定されている。饗宴に利用されたと考えられる建物では、赤彩の施されたオジロジカの頭骨や肩甲骨、ワニの顔を表象した壺形土器などがみついている。土器の内部には木の実などがぎっしり詰まっていた。

こうした占いや饗宴などの儀式用であろうか、単に身体を清潔にするためであろうか、蒸し風呂もほぼ原形を保ったままみついている（写真1）。入り口は狭く、屋根はドーム上で、ドーム内の中央にかまどがある。このかまどに、あらかじめ熱しておいた石をおき、そこに水をかけて蒸発させることで、サウナとしての機能をはたす。蒸し風呂の近くには椅子のような石が並んでいる。順番待ち用か。それとも浴後にマッサージでもあったのであろうか。

この他、一般住居よりも規模が大きく、かつ造りが重厚な建造物がある。村の集会所として利用されたと考えられている。また近年の調査では、イロパング白色火山灰を利用してつくられたサクベもみ

つまっている。当時の中心センターであったサン・アンドレス遺跡に伸びると想定されている。



写真1 ホヤ・デ・セレン遺跡の蒸し風呂

問題点：保存の難しさ

遺跡における最大の問題は、土製建造物の保存の問題である。熱帯地域に所在するがゆえに、特に雨期の湿気や大雨によって発生するコケやカビの影響は深刻である。コウモリや国鳥トロゴスの巣や糞の被害も同様である。エルサルバドル文化庁は、芸術品や歴史的建造物などの修復保存分野で国際的に有名なゲティ保存研究所などと協力し、これらの諸問題に取り組んでいる。

具体的には、温度や湿度などをデータロガーで集計する、あるいは被害の激しい部分をチェックするなどの対処法が検討されている。最も日常的に行わなければならないコケやカビ防止のための湿気対策としては、建物群を覆う屋根を変え、建物があるトレンチを拡張するなどして風通しや見通しを良くする工夫が施されている。

筆者もホヤ・デ・セレン遺跡から南に約6kmに位置するサン・アンドレス遺跡の土製建造物の修復保存活動にかかわっているが、その経験からいえるのは、土製建造物の保存には「継続性」がとくに重要であるということである。現物に処理を施す、あるいは周辺環境を整備して終わりではなく、その後の日々の清掃やメンテナンスが重要である。また現地に残る日干しレンガ造りなどの伝統的な土の技術を応用することも重要であると私考する。とくに我々のような国外研究者の場合には、安易に特殊な薬品や技術を適用しがちであるが、いかにして現地で持続可能な修復保存活動ができるかどうかを検討する必要があるだろう。

遺跡と地域住民の関係

ホヤ・デ・セレン遺跡と地域住民との関係は、表層的には存在していたとはいえ、必ずしも地域住民の生活と有機的に関連付けられていたわけではない。

そこで、そのような状況を打開するべくエルサルバドル共和国大統領府文化庁文化自然遺産局の職員らが中心となって、地域の文化資源の創造・活用にむけたプロジェクト「Proyecto: Oportunidades de desarrollo de productos culturales para jóvenes entorno al parque arqueológico Joya de Cerén, patrimonio mundial, El Salvador」が2014～2015年に実施された。

ユネスコからの資金援助^(註2)をうけた同プロジェクトでは、遺跡の周囲に位置する2つのコミュニティ(ホヤ・デ・セレンおよびアグア・エスコンディエダ)の若者らとともに、コミュニティに残る伝承や祭り、有効活用できる植物などに関する聞き取り調査を実施し、将来的に地域の活性化につながる文化資源を開拓した。プロジェクトに参加した若者らによって、地域に残る伝承や祭りが記録され、さらに藍染製品や植物を使った装飾品の開発、またホヤ・デ・セレン遺跡を核とした観光ルート案が作成されるなどの目覚ましい成果が得られたようである。これらの成果は、文化庁、中小企業支援機構、JICA関係者の出席のもと、ホヤ・デ・セレン遺跡公園で“Ferias Culturales”という形で公表された(写真2)。



写真2 Ferias Culturalesの様子

今後はより具体的なレベルで特産品の開発や販売ルートの開拓、観光客誘致などをおこなっていく必要があり、まだまだ残された課題は多い。とはいえ、何よりも若者らが聞き取り調査やワークショップ

プを通じて、身近にあるさまざまな価値に気づき始めたことは大きな一歩といえるだろう。

(註1)最新の年代測定プログラムと土器研究に基づけば、ロマ・カルデラ火山の噴火年代は紀元後650年頃が妥当であると筆者は考えている。

(註2)YOUTH PATH (Youth Poverty Alleviation Through Tourism and Heritage)というスキームで実施された。

●文化遺産マネジメントにおけるコスタリカ国立博物館の役割～遺跡の保存、観光開発、地域の調和を目指して～

植村まどか(京都外国語大学大学院外国語学研究科)

はじめに

2014年6月、コスタリカの石球として知られる「ディキスの石球を含む先コロンブス期首長制集落群」(以下ディキス集落群)がユネスコ世界遺産に登録された。コスタリカでは、タラマンカ山脈＝ラ・アミスター保護区群とラ・アミスター国立公園(1983年、1990年)、ココ島国立公園(1997年、2002年)、グアナカステ保全地域(1999年)の3つがユネスコの世界自然遺産として登録されており、ディキス集落群は国内の世界遺産としては4つ目、そして文化遺産としては初の登録である。このディキス集落群は、以下の点が評価されて登録に至った。

- ・先スペイン期中米南部地域における首長制社会の様子を明確に示す貴重な例であること。
- ・数々の石球に見られるような当時の社会における芸術的な手工芸制作技術の発展を示す例であること。
- ・集落群一帯のコミュニティと協働した事業により社会的・経済的発展が見込まれること。
- ・国の文化と歴史を築いた古代のインディヘナの人々に関する正しい知識や現在のインディヘナ・コミュニティの権利の保護につながること。

以上に見られるように、ディキス集落群の世界遺産登録には、現代とのつながりも重視されている。登録の際には、「申し分ないほどの豊かな自然と文化を有する郡でありながら貧困を抱える郡でもあり、世界遺産登録を契機に発展が見込める地域である」とも言及されている。本稿では、ディキス集落群の概要、現在までの経緯と現状について述べ、最

後にディキス集落群の運営管理を担っているコスタリカ国立博物館（以下国立博物館）が抱える課題について示したい。

ディキス集落群の概要と研究史

ディキス集落群は、コスタリカ南西部のプンタレナス州オサ郡、ディキス地方のデルタ地帯に位置している。現在この地域には、1940年～1980年頃の大規模なバナナプランテーション開発とともに流入した移民の子孫や、コスタリカ先住民のボルーカ族、クレ族が暮らしている。

ディキス集落群は、紀元後 300～1550 年にかけてこの一帯で栄えた、フィンカ 6、バタンバル、エル・シレンシオ、グリハルバ-2 の 4 つの首長制集落からなる遺跡である。ディキス集落群には、複数のマウンドや石畳が敷かれた広場、墓地、そして数百体もの大きささまざまな石球が見られる。ディキス地方に見られる石球は、小さいものだと直径 0.7m ほどだが、最大では直径 2.66m にもなる。



コスタリカ南部、ディキス集落群分布図
(Corrales 2015:10-11)

この地方の考古学的状況は、あまり恵まれたものではなかった。20 世紀半ば前後に発掘調査を含む考古学調査が実施されたものの、この頃からバナナプランテーションの開発が始まり、遺跡は開発や都市化、盗掘の危険にさらされるようになったのである。石球も動かされたり破壊されたりしたが、当時のコスタリカでは文化遺産を保護・管理する法律が整備されておらず、遺跡を守ることができない状態だった。

その後ディキス集落群が再び注目されるのは、国立博物館が再調査を決めた 1990 年代になってからである。特に 1992 年、国立博物館研究員だったキンタニージャが、フィンカ 6 で元位置を留めたままの、規則正しく並んだ石球を発見したことで保存の機運が高まり、バナナプランテーションの一面とな

っていた集落遺跡の一部を国立博物館が正式に保護・管理することになった。現在は国立博物館研究員のコレレスとバディージャによる調査を初めとして、調査件数も増加している。

ディキス地方の石球は、現在コスタリカを象徴するシンボルとしても国民に親しまれており、石球は首都サンホセにある国立博物館の敷地内で見ることができる。石球は屋外で展示されており、直射日光を浴び、雨季には毎日のようにスコールに見舞われるが、とりわけ劣化や損傷は見られない様子である。国立博物館へは筆者も幾度となく足を運んでおり、自分よりも大きなまんまるの石球を目の当たりにすると、毎度触らずにはいられない不思議な魅力がある。



コスタリカ国立博物館のパーティオに並ぶ石球（筆者撮影）

遺跡の保存・活用と地域コミュニティの連携

ディキス集落群のあるオサ郡は、「国内において考古学的価値がある郡」と法令で指定されており、1994 年 6 月 22 日付けで官報ラ・ガセタ紙にも明記されている。オサ郡では、2006 年から毎年「石球の祭り」(Festival de las Esferas) と題して遺跡周辺で様々なイベントが開催されている。これらのイベントはオサ郡の地方自治体と国立博物館が共同で開催しており、この地域に住む移民の子孫のほか、コスタリカ先住民のボルーカ族やクレ族も参加する。様々なイベントを文化的価値のある遺跡公園で行うことで、地域住民や観光客に自然遺産や文化遺産、石球について知ってもらい、より関心を持ってもらうことが狙いである。さらに、これらのイベントには地域住民だけでなく国内外から観光客が訪れることもあって、その経済効果が期待されている。イベントが、遺跡と地域住民、国立博物館の架け橋

となっているのである。

国立博物館が抱える文化遺産マネジメント課題

1990年代の再調査以来、国立博物館は遺跡周辺のコミュニティと連携した教育普及活動を行ってきた。さらに世界遺産登録にあたり、国立博物館はディキス集落群の保存・管理・継続的な調査研究・教育普及活動・観光業などを含む総合的な文化遺産マネジメントを担うこととなった。国立博物館にとって総合的な文化遺産マネジメントは、初の試みである。ユネスコの世界遺産登録では、持続可能な観光開発が盛んに謳われるが、総合マネジメントを一手に引き受けることになった国立博物館には課題も多い。

その一つが、実行力不足である。現在は、各集落遺跡の土地の一部を国立博物館が所有することに成功し、中・長期的視野での継続的な研究体制を整えただけでなく、コスタリカ政府観光局の援助を受けたフィンカ 6 の観光センター建設、遺跡周遊ツアーの検討など、基礎的な観光整備を進めている段階にある。また、観光センターでの飲食・物品販売、ツアーガイドとして、バナナプランテーションを退職した地域住民を再雇用する案や、先住民を含む地域住民と連携した遺跡の管理方法が検討されている。このように国立博物館は、総合マネジメントに向けて様々な案を出しながら検討しているのだが、経験不足、知識不足のために、実行力が中々伴わない現状がある。しかしこれについては、時間はかかっても一步一步経験を積み重ねていくほかなく、少しずつでも実現に向けて動き続けることが重要であろう。

もう一つの課題は、遺跡の修復・保存である。2014年の世界遺産登録時から 2015年の1年間で、約8000人の観光客が、観光の拠点であり、整備もされているフィンカ 6を訪れている。一方で、その他の集落遺跡はまだ観光のための整備がされておらず、観光客は自発的にこれらの集落遺跡を訪問している状況である。遺跡や自然の破壊を進めないためにも、未整備の集落遺跡の保存や、新しい観光ルートの設定は早急に行わなければならないことの一つであろう。

国立博物館は、開発と保存が対立しない形での発展、世界遺産をとりまく地域との協働による観光開発を目指して、持続可能な文化遺産マネジメントを模索している。

参考文献

Corrales, F.

2015 *Asentamientos Cacicales con Esferas de Piedra del Diquís: Sitio de Patrimonio Mundial Costa Rica*. Museo Nacional de Costa Rica, San José.

Corrales, F. and Badilla, A.

2012 Asentamientos precolombinos con esferas de piedra en el Delta del Diquís, sureste de Costa Rica. *Vínculos* 35(1-2):19-66.

2016 Gestión cultural y comunidad: el manejo de los sitios arqueológicos con esferas de piedra del Diquís. In *Memoria del Congreso Iberoamericano de Patrimonio Cultural: Lo Material y lo Inmaterial en la Construcción de Nuestra Herencia Vol.1*, edited by G. C. Vargas, pp.1-15, Universidad de Costa Rica, San José.

Museo de Arqueología e Historia de Montreal and Museo Nacional de Costa Rica

2008 *Costa Rica: Tierra de Maravillas*. Catálogo de la exposición.

●ペルー北海岸危機考古遺産—チム—文化の首都 チャンチャン遺跡—

サウセド・セガミ・ダニエル・ダンテ

(国立民族学博物館外来研究委員)

(翻訳 会報編集委員)

チャンチャンは、ペルー北部海岸ラ・リベルタ県トルヒーヨ市に位置する遺跡である。1460年にインカ帝国に征服されるまでこの地に栄えたチム—王国(紀元900-1460)の行政上、宗教上の首都と考えられている。



図1 修復されたチャンチャンの魚モチーフの壁
(筆者撮影)

この遺跡は、宮殿もしくはシウダデーラとして知られる 10 の巨大な方形の部屋、エリートや労働者の居住区、その他の大きな部屋などで構成されており、それらの構造物が 24km² もの広大な範囲に分布している (Gamboa 2015:25-26; Universidad Ricardo Palma 2000:148)。宮殿のうち最も大きいものは、210,900 m² にもなる。これらの大きな建築物のほとんどは、この遺跡の周囲に位置する聖なる山との関連で建設されたようである (Sakai 1998)。



図2 Nik An/ Tschudi 宮殿内の蜂の巣状の壁 (筆者撮影)

チャンチャン遺跡は、インカ帝国による征服とその後のスペイン人の征服によって少しずつ放棄されていき、植民地期にはエリート居住区を中心に盗掘の対象となった。

20 世紀になって、ベネット、シャーデル、ウィリー、その他の考古学者によってこの遺跡の考古学調査が実施された (Ministerio de Cultura 2016)。そして 1986 年にユネスコ世界文化遺産に登録されたのだが、同年に保存が危ぶまれる危機遺産リストにも加えられている。歴史上繰り返されてきた盗掘以外にも遺跡保存の問題点は多く、エル・ニーニョによる大雨の被害や、遺跡周辺住民による土地の不法占拠に起因する都市や農作地の拡大と当局との対立も、遺跡に深刻な影響を与えている (Gamboa 2015; UNESCO 2016)。また遺跡の保存資金をもたらしてくれる観光業も、同時に遺跡を傷つける要因となりうる。広大なチャンチャン遺跡で一般に公開されているエリアは全体のたった 1% であるが、多くの観光客は許可されていない順路を通して立ち入り禁止エリアに入り、壁や構造物を損傷してしまう。



図3 観光ルート外の壁の崩壊

このように大規模な遺跡では、ナスカの地上絵と同様、出入りの厳重なコントロールが難しく、不法侵入も防ぐことができない。遺跡への出入り口の近くのパンアメリカンハイウェイ上には遺跡博物館もあるのだが、それでもこのように広大なエリアを管理するには不十分である。

これらの危機に立ち向かうために、1998 年と 1999 年の間、この遺跡の保護活動のベースとなる「チャンチャン運営マスタープラン」が策定された。しかしこのプランに基づき、遺跡の保護・整備活動のために政府機関として直接的に予算を執行できる実施機関が設置されたのは、2006 年の文化省の創設に伴ってである。後にチャンチャン遺跡特別プロジェクトと名づけられるこの実施機関は、様々なエリアの遺跡整備を担当する専門家グループを常駐させ、それが保存専門家の育成にも役立っている。また国家資金のおかげで、保存のための調査や観光ルート改善など、遺跡の保存・整備に関する様々なプロジェクトが実施されている。

調査では、3D スキャナーを用いた建築物の登録を始めとする、様々なプロジェクトが実施された。そして文化省もまた、考古学博物館の改善のために予算を拡大している。このように、プロジェクトの進展によってチャンチャン遺跡の保護・観光整備が進み、それによって観光客数が増加し、ひいては遺跡が価値あるものとして地域住民に認識されることが期待されている。

しかし、たしかに観光はこの規模の遺跡にとって重要ではあるが、最大の問題は長期的視野の調査計画がないことであると筆者は考えている。その一つは学問的な研究調査である。チャンチャン遺跡で考古学的に知られていることはまだとても少なく、観

光事業だけでなく、学問的な研究プロジェクトも必要である。そしてもう一つが、教育に関する調査である。単に魅力的な観光地として訪問されるのを待つだけでなく、積極的に遺跡周辺住民とともに実施されるような活動が求められる。その意味で、この地域の小学校、中学校とともに行えるような活動を模索することはとても重要である。しかし現在、社会化見学のような形での訪問はあるものの、訪問後の活動追跡すらほとんどされておらず、考古学博物館でも教育の専門家は存在しない。

こうした教育に関する状況はチャンチャン遺跡のみで起こっているのではなく、ペルーの遺跡のほとんど全てで似たような状況が見られる。ようやくここ 10 年でランバイエケ県のトゥクメ博物館、ラ・リベルタ県のモチェ遺跡、リマのパチャカマク博物館のように、教育の専門家を加えるところが出てきており、将来これらの博物館の教育的取り組みに、チャンチャンのような遺跡がどのように応じることができるのか、その活動の評価が待たれるところである。

参考文献

Gamboa, J.

2015 *Archaeological Heritage in a Modern Urban Landscape: The Ancient Moche in Trujillo, Peru*. Springer, New York.

Ministerio de Cultura

2016 Proyecto Especial Chan Chan. <http://chanchan.gob.pe>. アクセス日：2016 年 6 月 20 日

Sakai, M.

1998 *Reyes, estrellas y cerros en Chimor: el proceso de cambio de la organización espacial y temporal en Chan Chan*. Editorial Horizonte, Lima.

UNESCO

2016 Chan Chan Archaeological Zone. <http://whc.unesco.org/en/list/366>. アクセス日：2016 年 6 月 20 日

Universidad Ricardo Palma

2000 *Culturas Prehispánicas*. El Comercio S.A., Lima.

●コンチュコス地域におけるインカ道（カパック・ニャン）の観光活用にみられる現状と問題点

大谷博則（奈良大学大学院博士後期課程満期退学）

2001 年以降、ペルー主導のもと、アルゼンチン、エクアドル、コロンビア、チリ、ボリビアらの南米六ヶ国では、インカ道（Qhapaq Ñan）の世界遺産登録活動が進められ、2014 年、カタールのドーハで開催された第 38 回ユネスコ世界遺産委員会において、文化ルート（Cultural Routes）として、世界遺産に登録された。6 カ国共同による登録であり、インカ道は国境を越えた遺産でもある。

インカ道は、全長 60,000 km 以上にも及ぶインカ帝国の通信交通網である。道は各地の宗教・行政・軍事センターを結び、随所に宿場、飛脚、倉庫などが設置されさまざまな物資・情報が管理されていた。ペルー国内では、7 区間累計 250km、81 の考古遺跡ならびに 156 の集落が登録されている。



図 1 インカ道路線図 ©ペルー文化省

インカ道というと、一般的にはマチュ・ピチュへのインカ道トレッキングが有名であり、年間 18 万人ほどの観光客がこのトレッキングを利用していると推定される。しかし、世界遺産に登録されたそのほかの区間においてはどうかだろうか？

著者は2007年以降、ペルー・コンチュコス地域でインカ道の現状調査をしてきた。コンチュコス地域には、世界遺産に登録されている、ワヌコパンパ・マルカワマチュコ区間のインカ道が所在する。2003年以降、山岳研究所というNGOにより地域住民参加型の観光開発が進められてきた。そして2008年からは、ワラス市内の観光代理店とワリ市内の地元NGOクントゥルに旅行業務を委譲し、観光客誘致のためのプロモーション活動を実施、2011年まで調査・開発事業が続けられた。地域住民によると、2011年には、年間50人以上の観光客がインカ道トレッキングに参加したそうである。しかし、2015年にワラス市内において観光代理店を中心にインタビューした結果、2014年に世界遺産登録されて以降、観光客数は0人であった。



写真1 インカ道（コンチュコス地域）（筆者撮影）

文化ルートに分類される世界遺産の特徴として、特定の世界遺産に観光客が集中するのを防ぎ、観光客による圧力を分散したり、より多くの地域社会が世界遺産による経済的利益を享受できる可能性が指摘される。しかし、ワヌコパンパ・マルカワマチュコ区間においては、インカ道の観光活用は機能しておらず、その問題点は以下の通りである。

1. 観光誘致のための事業（イベントの実施、テレビ番組によるプロモーション）がない。また、詳細な観光地図や立看板の設置など、実際にトレッキングをするために必要な情報が整備されていない。
2. インカ道に至るまでの道路交通インフラ整備が不十分なため、観光客がインカ道にアクセスしにくい。
3. インカ道の保存状態が悪く、観光資源としての価値が低い。また、このような保存状態から、トレッキングをする際の利便性に欠ける。



写真2 自然災害によるインカ道の消失（筆者撮影）

幸い、これらの問題点のいくつかは2016年から2017年にかけて解消される可能性が高い。1の観光事業そのものに関しては、ペルー文化省がコンチュコス地域の自治体と協働体制を確立し、地方自治体の責任のもと、誘致事業が実施されることとなった。また、立看板の設置に関しても、ペルー文化省と地元自治体の協働のもと、2017年施工予定である。

2のインカ道にアクセスするための道路等のインフラ整備に関しては、アンタミナ鉱山の出資により、一部区間において、2016年5月から舗装道路の補修工事が進められている。

しかし3の保存状態や利便性に関しては、解決が極めて困難であり、現状では、ペルー文化省は対応できていない。以下では、これらの問題点の詳細を述べたい。

著者は、2011年にコンチュコス地域のインカ道を踏査し、その保存状態に関して統計資料を作成した。その結果、30%がインカ道として認識でき、30%は山道との識別がほぼ不可能であり、残り40%は自然災害や道路建設等により消滅していたことがわかった。具体的には、1日8時間歩くうち、3時間程度がインカ道であり、残り5時間は車道か山道なのである。この30%ほど残るインカ道の道路遺構に関しても、インカ道らしい石畳や石壁などが明確に認識できる区間がそれほど残存しておらず、残存していても雑草により覆われているため、見応えがないのが現状である。また、ペルーでのトレッキング利用客の多くは、自然景観の魅力を楽しむために訪れるが、当区間には、美しい湖も氷河も存在しない。

そしてそれ以上に問題なのが、消滅した40%に

見られるような現状である。ペルー山岳部のインカ道は、集中豪雨や土砂災害等により危機にさらされており、筆者が踏査した際も、何箇所にもわたり、崖を降りて上らなければ進めないような区間が確認された。

自然災害とは別に、人的被害も確認されている。2012年には、ワリ郡南部において道路開発により2km程失われた。この事件は一般的なものであり、消失したインカ道のおよそ80%以上が道路開発によるものである。その他にも、インカ道遺構上を重機が通過するという事件も例年報告されている。



写真3 雑草に覆われたインカ道（筆者撮影）

このように、インカ道の世界遺産登録による、観光客の圧力分散や複数地域への利益享受は、世界遺産登録以前に文化省が想定していたほどは、うまく機能していないのが現状である。

そもそもインカ道の顕著な普遍的価値が認められ世界遺産に登録されたならば、まずその価値を保全し、地域社会の中で活用されるよう、省庁間や地域社会との連携体制を早急に構築すべきである。また、インカ道を観光資源として活用するためには、誘致やそこに至るアクセスの整備だけでなく、遺産の保存事業による文化的価値の向上が重要となる。

しかし、2016年現在、文化省はインカ道の保全・保存のために必要な予算を獲得できておらず、2014年から2年かけてようやく立看板の設置に取り組めるかどうかという進捗状況にある。10年以上かけて実現した世界遺産登録であれば、このまま危機遺産としてしまわないためにも、文化省はインカ道の保全を政策として確立すべき時期にあるといえよう。

●チャビン・デ・ワントル村の観光振興

中川渚（総合研究大学院大学文化科学研究科）

チャビン・デ・ワントル遺跡は、ペルー北部高地、アンカシュ県にある神殿遺跡である。アンデス形成期研究の端緒となった遺跡であり、形成期芸術の粋が見られる遺跡でもあり、また遺跡内には当時の儀礼埋納が多数確認された複雑な回廊が巡らされており、形成期研究の中でも有名な遺跡として耳にしたり実際に訪れたりしたことのある会員も多いと思う。チャビン・デ・ワントル遺跡は1985年ユネスコ世界遺産に登録された。

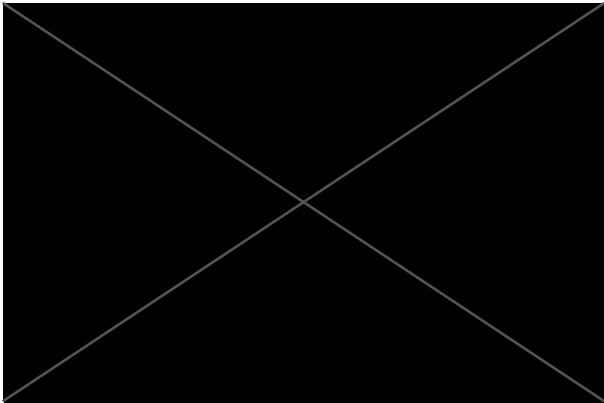


チャビン・デ・ワントル遺跡

チャビン・デ・ワントル遺跡は同名の村のすぐ近くにある。2015年1月、ようやくこの遺跡を訪れる機会を得て、偶然にもチャビン観光協会の会長であるフィロメナ・パラシオス女史（当時）と知り合った。地元愛が大変強く、ケチュア語とスペイン語両方を器用に駆使しながら話す。チャビン・デ・ワントル遺跡への愛情にも並々ならぬものがあり、この遺跡を世界中の人に知ってもらいたい、そしてそれが地元チャビン・デ・ワントル村の発展にもつながってほしいと、願うだけでなく行動も起こす、とてもパワフルな人である。

さらに同じくこの村出身で、30年以上もの間、様々な考古学者の元で発掘作業員として働き続け、発掘調査のオフシーズンである雨季の間は同遺跡の観光ガイドとして働いているアレハンドロ・エスピノサ氏が、遺跡の案内をしてくれた。淡々と「〇年に地表から〇cmのところまで～が発見され」とすばらしい記憶力で考古学者顔負けの説明をする。彼もチャビン観光協会の一員であり、半生以上関わり続けている同遺跡への思い入れは非常に強い。そして2人は私を案内してくれている間にも、遺跡の重

要性やら観光振興のことで議論を始めるのである。



フィロメナ・パラシオス女史と

そんな彼らの懸念は2つある。年間約7万人の旅行者がここを訪れるのだが、旅行者がアンカシュ県の県庁所在地であるワラスからの日帰りで行ってしまうこと、そして観光振興に向けて盛り上がっているのが、飲食店や宿泊施設の経営者、土産物の露天商を営んでいる人など経済的な恩恵を直接的に受ける人たちに限られていることである。実際にフィロメナ女史も、チャビン・デ・ワンタル遺跡の手前にあるレストランのオーナーである。

チャビン・デ・ワンタル遺跡を観光しようと思うと、ほとんどが旅行会社のツアーに申し込むことになる。ワラスからチャビン・デ・ワンタル村までは車で約3時間の距離であるが、公共交通機関の本数が限られており、自力で往復することが困難なためである。また、チャビン・デ・ワンタル村はそこまで大きな村ではないので、ピンポイントで遺跡を観光するならば1泊する必要はないと考える人が多く、ツアーは日帰りで行われている。チャビン・デ・ワンタル遺跡周辺にもいくつも遺跡はあるのだが、周辺遺跡観光を含めたパッケージ化はされていない上、そもそもそれらの遺跡やそこに至る道の整備がされていない。そしてそれ以前にチャビン・デ・ワンタル遺跡はアンデス形成期研究の中では有名でも、マチュ・ピチュ遺跡のように知られているわけではない。アンカシュ県を訪れる観光客の主な動機はむしろ、同県が抱える別の世界遺産、ワスカラン国立公園であることが多く、チャビン・デ・ワンタル村のために時間を割くことが念頭に置かれていないことも滞在日数の延長を難しくしている。

観光振興への関心については、村民の主な生業が農牧業であるため、観光客が増えようがあまり関係ないと無関心な人が多いという。道の整備や町の美

化には村民の協力が不可欠な上、フィロメナ女史の想いは経済発展だけでなく、チャビン・デ・ワンタル遺跡と当時の豊かな文化を地元のアイデンティティの核にしたいというところにもあるので、村民の無関心は二重に悩みの種なのである。



チャビン・デ・ワンタル村の中央広場

パワフルなフィロメナ女史は、現在チャビン・デ・ワンタル村役場で、観光・文化・スポーツ担当責任者として働いている。彼女が目指したいのは、近年取り上げられることの多いエコツーリズム型の発展^(註1)と思われるが、やはり一番難しいのはどのように関係者を巻き込めるか、という点だろう。

エコツーリズムの推進には、旅行者、地域住民、観光業者、研究者、行政の5つの立場の人々のバランスの良い協力が不可欠と言われる^(註2)。地域住民だけでなく、これら全ての立場の人々をうまく巻き込むことが、当面の課題ではないかと思われる。

(註1) エコツーリズムとは、「自然環境や歴史文化を対象とし、それらを体験し、学ぶとともに、対象となる地域の自然環境や歴史文化の保全に責任を持つ観光のありかた」とされており、固有の魅力を地域ぐるみで観光客に伝えることで、地域住民も自分たちの資源の価値を再認識し、観光のオリジナリティが高まり、地域社会そのものが活性化されていく発展モデルが想定されている(環境省ホームページ <http://www.env.go.jp/nature/ecotourism/try-ecotourism/about/> アクセス日: 2016年6月20日)。

(註2) 日本エコツーリズム協会ホームページ (<http://www.ecotourism.gr.jp/index.php/what/> アクセス日: 2016年6月20日) より。

第6回東日本部会研究懇談会 『古代アメリカの土器』

第6回東日本部会研究懇談会は、平成28年6月11日（土）、東京大学総合研究博物館にて開催された。本会は毎度、同会場で開催してきたが、今回は博物館が約2年半ぶりにリニューアル・オープンしたタイミングだったため、いつも足を運んでくださる会員には新鮮だったのではないだろうか。

今回はパナマにおける中米最古の土器と、ペルー北部高地におけるアンデス形成期の土器を対象に研究する2名の若手研究者を迎え、「古代アメリカの土器」と題し報告いただいた。考古学にとって最も基礎的な資料である土器を、深く研究されているお二人の話を伺い、土器からどのような議論が展開可能なのかを考える企画であった。天候が心配されたが快晴となり、会員20名、非会員12名の参加があった。特に若い学生会員の姿も多くみられたことが、幹事として喜ばしいことであった。

飯塚文枝会員（プロジェクト研究員、カリフォルニア大学マーセド校、人文社会科学部）の「パナマにおける土器の出現（約4500～3200¹⁴C BP）とその使用法および定住度との関係について」は、行動考古学理論と理化学的分析手法を用い、土器の製作技術と使用目的、流通という諸問題に焦点を当て、土器出現期の技術的・行動的背景を考察するものであった。中川渚会員（総合研究大学院大学博士課程）の「ペルー北部高地パコパンパ遺跡の儀礼と社会階層化—土器製作・流通・消費分析から—」は、儀礼コンテキストから出土した土器と他のコンテキスト出土の土器の比較検討を通し、儀礼コンテキストの土器が製作・流通段階から儀礼のために準備され消費されていた点を指摘し、これまで一括して饗宴と呼ばれてきたコンテキストの具体的な輪郭の一部を提示する発表であった。

飯塚報告のコメンテーターとしては松本雄一会員（山形大学准教授）、中川報告のコメンテーターとして井口欣也会員（埼玉大学教授）、また古代アメリカという枠を超えた議論を試みるため、両報告にまたがるコメンテーターとして西アジア考古学が専門の小高敬寛氏（東京大学特任助教）を会員外からお招きした。同じ考古学分野とはいえ、西アジア考古学とアメリカ考古学の間には用語や概念に開きがあり、

小高氏には大変ご苦労いただいたようだが、地域や時代を超えた立場からコメントをいただけたことで、土器というキーワードを中心に幅広く議論を深めることができた。会場からの質問やコメントも多数寄せられ、予定時間を超える活発な議論がおこなわれた。発表内容の詳細については、学会ウェブページに掲載されている抄録を参照いただきたい。

東日本部会研究懇談会は6月前後の開催が定着してきたこともあり、本年度も昨年度に続き、在外会員の一時帰国を狙っての企画となった。発表者の飯塚氏はアリゾナ大学で博士号を取得され、現在も米国で教鞭をとられている。米国とパナマで培われた飯塚氏の研究成果を聴くことは、本学会員にとって利益になると考えた。

また、中川氏には執筆中の博士論文から研究発表いただいた。参加者との議論では前向きなコメントが多く出され、研究上の課題もだいぶ整理されたように思う。

さて、本学会が21年目を迎えた今年、東西部会の研究懇談会は5周年を迎え、発表者の総数も20名を超えた。ようやく本会も会員に周知されて来たのではないかと思う。役員改選にともない次年度以降の運営方法や会場、幹事はかわるかもしれないが、12月の研究大会・総会への参加が困難な会員には、もう一つの研究発表の機会として、研究懇談会の活用をご検討いただきたい。

また、東西部会では修士論文発表会を3月に開催することとなった。今年度は残念ながら該当者がおらず開催がかなわなかったが、非会員でも発表可能であるため、来年3月までに修士論文を提出する学生会員には是非奮起を願いたい。

（東日本部会幹事：福原弘識）



●公開シンポジウム

「アンデス文明初期の神殿と権力生成」

中川渚（総合研究大学院大学）



（写真提供：科学研究費補助金基盤研究（S）「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」プロジェクト）

2016年1月30日（土）、1月31日（日）の二日間にわたり、キャンパス・イノベーションセンター東京、国際会議室にて公開シンポジウム「アンデス文明初期の神殿と権力生成」が開催された。主催は国立民族学博物館 科学研究費補助金基盤研究（S）「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」（研究代表者：関雄二）、古代アメリカ学会が協力した。二日間にわたる開催であったものの、両日ともに多くの参加者があり、その数は70人に上った。

このシンポジウムは、長年にわたるパコパンパ遺跡調査プロジェクトの集大成として企画された。まず主催者である関雄二氏より、趣旨説明として日本人研究者によるこれまでのアンデス考古学研究成果と、そこから導き出されたアンデス文明初期の権力形成過程に関する課題について説明がされた。そして同遺跡の発掘成果や各遺物の分析成果に関する9本に上る研究発表がされた後、パコパンパ遺跡以外で得られているアンデス形成期の最新の研究成果が4本提示された。

パコパンパ遺跡では長年にわたり広範囲の発掘調査を実施しており、遺物分析もそれぞれを専門とする研究者が担当している。このような調査方法によって、発掘調査によって得られた大量の遺物を詳細に分析することができ、本シンポジウムの前半では、このような地道な分析・調査の積み重ねならで

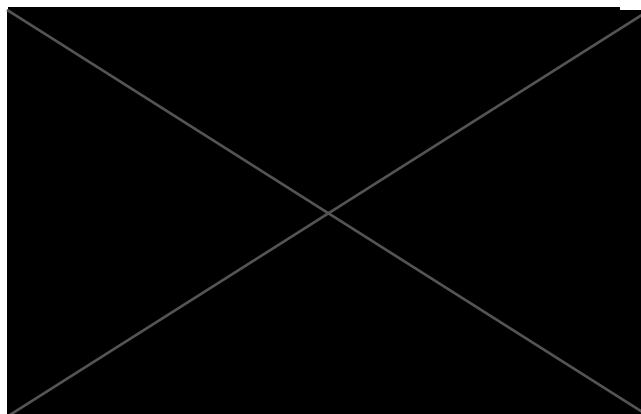
はの中身の濃い成果が示された。そして後半ではアンデス地域を俯瞰して権力形成過程を考察するために、ヘケテペケ中流域、クントゥル・ワシ遺跡、セロ・ブランコ遺跡、カンパナユック・ルミ遺跡における最新のアンデス形成期の研究成果が提示された。いずれも長年にわたり地道な研究が続けられている遺跡や地域であり、それぞれのデータに基づく社会プロセスや権力形成過程が示された。

最後に、二日目の研究発表後に設けられた総括の時間を通して、「アンデス文明初期の神殿と権力生成」のテーマのもと、分野・地域の垣根を越えた活発な議論が展開された。

●企画展

「ナスカの地上絵～山形大学人文学部附属ナスカ研究所の成果から～」

瀧上舞（山形大学）



（写真提供：山形大学人文学部）

2016年2月14日から3月13日まで、山形県郷土館文翔館創建100周年記念の企画展のひとつとして、「ナスカの地上絵～山形大学人文学部附属ナスカ研究所の成果から～」と題した展覧会が開催された。本企画展の主催は公共財団山形県生涯学習文化財団および山形大学人文学部附属ナスカ研究所、後援は在日ペルー大使館であった。さらに古代アメリカ学会と日本学術振興会科研費「古代アメリカの比較文明論」（代表青山和夫）、凸版印刷株式会社、山形大学附属博物館の協力で開催された。2月14日のオープニングセレモニーでは、駐日ペルー共和国特命全権大使のエラルド・エスカラ大使や、文翔館の峯田喜八郎館長、山形大学人文学部附属ナスカ

研究所所長の北川忠明人文学部長らによる開催の挨拶と、テープカットが行われた。その後、山形大学人文学部坂井正人教授によるギャラリートークが実施された。

本企画展は、山形大学の最新の研究成果を山形県で初めて本格的に紹介するもので、写真や土器のレプリカなど計 57 点の資料が公開された。展示は文翔館 3 階のギャラリー1 からギャラリー4 までの 4 部屋にまたがり、ギャラリー1 では開催にあたっての挨拶と、ナスカ台地の地理的環境やアンデス文明におけるナスカ文化の位置づけなどの、ナスカ地域の概略に関する説明パネルが設置された。ギャラリー2 では、ナスカ社会の儀礼や図像表現、食事情など、山形大学での研究成果の一部が紹介され、2006 年に作成された短編映像「ナスカ」も上映された。ギャラリー3 には、ナスカの地上絵の 3D 模型や地上絵の空撮写真、レプリカの土器が展示された。最後のギャラリー4 では、山形大学によるナスカ研究のこれまでの成果や遺跡保護活動、人文学部附属ナスカ研究所が紹介された。会期中の土日には、山形大学人文学部の学生らによる展示解説のツアーも実施され、期間中の観覧者数は 6,919 人に上るなど、展示会は大盛況であった。

●学術講演会

「認知心理学からみたナスカの地上絵」

瀧上舞（山形大学）

先に報告した山形県郷土館での企画展「ナスカの地上絵～山形大学人文学部附属ナスカ研究所の成果から～」の開催初日である 2 月 14 日に合わせて、山形大学人文学部渡邊洋一教授による学術講演会「認知心理学からみたナスカの地上絵」が文翔館議場ホールで開催された。企画展同様、主催は公共財団山形県生涯学習文化財団および山形大学人文学部附属ナスカ研究所、後援は在日ペルー大使館、そして古代アメリカ学会と日本学術振興会科研費「古代アメリカの比較文明論」（代表青山和夫）、凸版印刷株式会社、山形大学附属博物館の協力によるものであった。一時間半の専門的な講演会であったにも関わらず、約 120 名もの一般市民が訪れた。全体的には年配の男性の方が多かったが、中には小学生の参加も見られ、年齢を問わず山形地域でナスカ研究への関心が高いことが伺えた。

渡邊氏は約 12 年間にわたって、現地調査を行いながらナスカの地上絵の認知心理学的研究に携わっている。講演会ではその成果の一部として、「地上絵の位置や方向、大きさがどのような枠組みのもとで決められたのか」というテーマのもと、様々な方向や距離からの地上絵の見え方に関する検証結果が提示された。その上で氏は、通常人間が文字や図像を描くときは、読む人や見る人の距離を考えてその大きさを決めることから、近くで見て全体像が把握できない地上絵は、遠くから見られることを想定して描かれたと結論づけた。さらに「なぜ砂漠に地上絵を描いたのか」という問題提起に対し、動物の地上絵の多くは空や天上から見られることが想定されており、豊穡を祈る儀礼的役割があった可能性が示された。一方で、幾何学図形の地上絵は、移動の際に場所や方向の目印となるランドマークとしての機能があったことも紹介された。その理由として、人間は周囲の空間を把握して認知地図を構成することで初めて安全に生活し、移動できるようになるため、広大な砂漠における目印となる地上絵を描く必要があったことが挙げられた。最後に質疑応答の時間が設けられ、発表を聞いた市民の方々から複数の質問の手が挙げられた。講演会後は、文翔館本館で開催されているナスカ展に向かう参加者が多く見られた。



（写真提供：瀧上舞）

●公開講演会

「最近のナスカ研究の動向」

「ペルー南海岸ナスカおよびイカ地方の考古学的秘宝」

松本雄一（山形大学）

2016年3月6日（日）、山形市文翔館において、近年のナスカ研究を紹介する公開講演会が開催された。午前中の開催であったにもかかわらず、約130人の一般参加があった。この講演会は、山形市文翔館で2月14日～3月13日まで開催された企画展「ナスカの地上絵～山形大学人文学部附属ナスカ研究所の成果から～」にあわせて開催された。この企画展の主催は（公財）山形県生涯学習文化財団と山形大学人文学部附属ナスカ研究所、後援は在日ペルー大使館、協力は古代アメリカ学会、日本学術振興会科研費「古代アメリカの比較文明論」（代表：青山和夫）、凸版印刷株式会社、山形大学附属博物館であった。

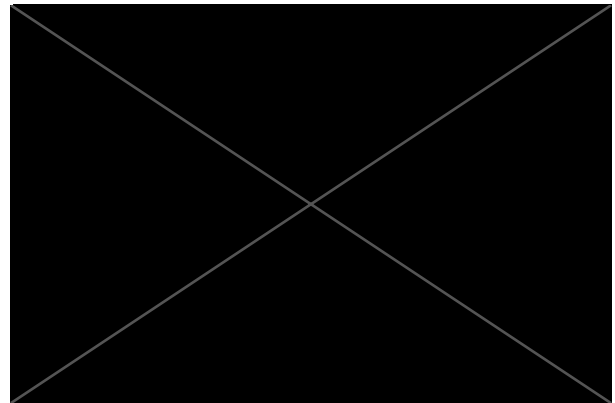
今回の公開講演会ではナスカ研究の最先端を紹介することがテーマとなった。カリフォルニア大学のケヴィン・ボーン副部長と山形大学の坂井正人教授が講師となり、それぞれの独自の調査と現在のナスカ研究との関わりを講演した。

最初に坂井正人が、山形大学のナスカ研究の成り立ちとナスカ文化の編年を紹介することで講演会の基礎となる知識を提示した。さらに山形大学の調査チームが採用する学際的なアプローチに関する紹介がなされ、その成果として、近年の同チームに

よって発見された「ラクダ科動物のリャマの地上絵」、「人間の首を切断している場面の地上絵」などのパラカス後期と比定される地上絵が巡礼ルート上に位置する目印であったという新たな解釈が提示された。

続くケヴィン・ボーンは、これまでの地上絵に関する議論を踏まえた上で、考古学的調査の重要性を主張した。当時利用された鉱山や居住域など、これまで注目されることのなかった遺跡遺構の調査を通じて、ナスカ文化の社会組織や宗教的世界観にアプローチする事例が紹介された。

発表後には、質疑応答の時間が設けられた。参加者からは地上絵の役割からその保存の可能性にいたるまでの様々な質問が投げかけられ、活気のある質疑応答であった。



講演中のケヴィン・ボーン(写真提供：山形大学人文学部)

会員の受賞

本学会の杉山三郎会員が、ハーバード大学からH.B.ニコルソン・メソアメリカ研究優秀賞を受賞されました。本賞はメキシコ・中米の先住民文明研究の分野で、数年に一人だけが選ばれる大変名誉ある賞です。杉山会員がメキシコのテオティワカン遺跡で1980年代から実施してきた、三大ピラミッドの調査成果と、メキシコ古代史解明に対する長年の貢献が高く評価されました。アジアの研究者として初の受賞という快挙です。

また、大貫良夫会員、関雄二会員がペルー国文化

功労章を受章されました。大貫良夫会員は55年間にわたるペルーでの考古学調査の実施とその傑出した成果、カハマルカ盆地の形成期編年の確立、そして文化遺産保護活動が評価され、関雄二会員は36年間にわたる考古学調査の実施と出土遺物分析によるペルー考古学への多大な貢献、および遺跡周辺の住民を包摂した文化遺産保護活動が認められての受章となりました。

お三方の受賞は本会にとっても大変喜ばしいことです。誠におめでとうございます。

第 10 期(2015.6.14.~2016.12.31)の新役員紹介 (増員分)

古代アメリカ学会 2015 年度総会において、運営委員の定員を 10 名に増員することが承認されました。それに伴い、事務幹事補佐として松本剛会員(山形大学、日本学術振興会特別研究員 PD) が会長よ

り指名されました。学会の運営につきまして、今後とも会員の皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

事務局からのお知らせ

1. 第 21 回研究大会・総会の開催について

昨年の総会および『古代アメリカ学会会報』第 39 号でもお知らせしましたように、古代アメリカ学会第 21 回研究大会・総会を 2016 年 12 月 3 日(土)と 4 日(日)の 2 日間にわたって開催いたします。当初、茨城大学で開催と案内いたしましたが、会場手配の都合により**国立民族学博物館**での開催となりました。これにともない大会実行委員長も青山和夫会員から関雄二会員に変更となります。どうぞご理解ください。ご多忙のこととは存じますが、万障お繰り合わせの上ご参加いただきますようお願いいたします。

本学会では研究発表について審査制をとっています。発表を申請される会員は、研究大会実行委員長による後述の「2. 第 21 回研究大会における研究発表等の申請方法と審査について」をご参照の上、研究発表の申請をしていただきますようお願いいたします。

なお、研究大会、総会のご出欠については、すでに事務局から発送した郵送物に同封されておりますハガキにてご返信をお願いします(2016 年 9 月 30(金)消印有効)。また、12 月 3 日の総会終了後に懇親会を企画しておりますので、あわせてご出欠についてお知らせ下さい。

総会にご欠席の方は、同ハガキによる委任状へのご署名にご協力をお願いいたします。

古代アメリカ学会では、研究大会において、20 回大会より分科会枠を導入しました。分科会は、特定の研究テーマに即して、代表者を含めて 3-5 名のグループで発表・討論する場です。分科会に割り当てる時間は、口頭発表者数×20 分を予定しています。この時間をどのように使うかは、分科会で判断してください。口頭発表の時間を削って、コメンテーターを導入したり、討論の時間を増やすことは、分科会の判断で可能です。なお、分科会は個人発表と同じ会場で実施します。発表時間が、個人発表と重な

ることはありません。個人発表と分科会発表をあわせ、口頭発表できる機会は 1 人 1 回です。分科会はコメンテーターを指名することができますが、それは口頭発表として数えません。分科会を組織する方は、分科会のタイトル、発表者(変更不可)、趣旨説明(1200 字程度)、全発表者の要旨(各 800 字程度)を取りまとめて、学会事務局<jssaa@sa.rwx.jp>宛てに、2016 年 9 月 30 日(金)午前 10 時(メール必着)までに送付してください。なお、返送用ハガキの「発表申請」については「有」にマルで囲んでご返送下さい。

記

古代アメリカ学会第 21 回研究大会・総会

1. 日時：一日目 2016 年 12 月 3 日(土)

研究大会 13:00~17:00(予定)

総会 17:00~18:00(予定)

懇親会 18:30~(予定)

二日目 2016 年 12 月 4 日(日)

研究大会 09:00~12:00(予定)

(発表本数が多い場合は、午後の部もおこないます)

2. 場所・会場：**国立民族学博物館**

(大阪府吹田市千里万博公園 10-1)

2. 第 21 回研究大会における研究発表等の申請方法と審査について

古代アメリカ学会第 21 回研究大会実行委員長
関雄二

会員より申請があった研究発表については、研究大会実行委員会が審査をおこなったうえで発表許諾の可否について通知いたします。

研究発表を申請される会員は、以下の要領にしたがって申請をして下さい。

記

以下の事項を記入し、PDF ファイル（またはワードファイル）にて事務局に添付ファイルでお送り下さい。なお、返送用ハガキの「発表申請」におきまして「有」をマルで囲んでご返送下さい。

1. 発表申請者（会員に限ります）
2. 発表申請者住所・e-mail（発表申請者に対して審査結果をメールで通知します）
3. 発表カテゴリー（研究発表、調査速報、ポスターセッションのいずれか）
4. 発表タイトル
5. 研究発表著者（共同発表の場合、研究大会抄録、プログラム等に記載する順番通りに記入してください）
6. 口頭発表者（実際に口頭発表をおこなう者。会員に限ります）
7. 発表要旨（研究発表：1200 字程度、調査速報：800 字程度、ポスターセッション：800 字程度。要旨とは別に 1・2 枚の図版等を添付することも可としますが、その場合も要旨のテキストと同じファイルの中に組み込み、一つのファイルにして送付してください）A4 判にて、1 ページ 40 字×40 行、横書き、余白は上 35 mm、下・左・右 30mm、文字は 10.5 ポイントで作成してください。

（*発表時間は、質疑応答を含め調査速報 20 分、研究発表 30 分を予定しています。ポスターセッションは A0 で 2 枚以内によるものとします）

*送付先：jssaa@sa.rwx.jp（学会事務局）

*締切：2016 年 9 月 30 日（金）午前 10 時（メール必着）

審査結果については、10 月 17 日（月）頃までに、申請者にメールで通知いたします。この通知と同時に、発表許諾者にたいしては、抄録要旨の原稿依頼・執筆要領などもおしらせしますので、決められた期日までにご提出をお願いします。

なお、審査基準については、以下の「参考」をご参照下さい。とくに、単独発表か共同発表か、また著者の記載順をどうするかなどについては、あらかじめよくご調整のうえ申請をなさるようお願いいたします。

*参考 「古代アメリカ学会研究大会運営に関する申し合わせ（平成 23 年 12 月 2 日役員会決定）」より抜粋

・発表についての審査は、以下の原則に照らして判断することとする。

（内容）

(1)研究大会でおこなわれる発表は、現在の一般的研究状況において一定の水準に達していなければならない。

(2)発表の内容が、他の研究者の著作権やデータに関する権利を侵害してはならない。

（形式）

(1)（口頭発表をおこなうことができる者）

口頭発表者（実際に口頭で発表をおこなう者）は会員でなければならない。ただし実行委員会が企画した招待講演・発表等についてはこの限りではない。

また、口頭発表者は、会員であれば第 2 発表者以下でも差し支えない。

(2)（発表者および共同発表者の記載順）

発表者名（単独発表か共同発表か、共同発表の場合発表者記載順など）は、データに関する権利等の観点から適切でなければならない。このため、口頭発表者が会員であれば、非会員は第 2 発表者以下の共同発表者となることことができる。

(3)（複数の口頭発表についての制限）

1 回の研究大会において会員が口頭発表をおこなう機会は一人 1 回とする。ただし、複数の共同発表者（記載順を問わない）となることことができる。

以上

3. 原稿募集

①会誌『古代アメリカ』の原稿募集

本学会の会誌『古代アメリカ』第20号(2017年12月発行予定)に掲載する、「論文」・「調査研究速報」・「書評」の原稿を募集しています。「調査研究速報」では、発掘などのフィールドワークの成果・報告はもちろんのこと、文献調査の報告やラボラトリーでの分析結果報告などの投稿もお待ちしております。投稿希望者は、2015年12月改定版の寄稿規定および執筆細目(ウェブサイト掲載)をよくお読みの上、ご投稿ください。

投稿に際しては「投稿エントリーカード」の提出が必要となります(2017年3月31日提出締め切り)。「投稿エントリーカード」は、ウェブサイトよりダウンロードしてください。カテゴリーにかかわらず、原稿の提出締め切り日は、2017年5月20日です。「論文」と「調査研究速報」の掲載の可否は、規定による査読(原稿受領後1~2か月程度で終了予定)の結果を踏まえ、編集委員会で決定します。

お問い合わせ先:

大平秀一(運営委員、会誌編集担当)

〒259-1292 神奈川県平塚市北金目4-1-1

東海大学文学部アメリカ文明学科

Tel. [REDACTED]

Fax. [REDACTED]

E-mail: aant.edit@gmail.com

②会報「41号」の原稿募集

会報の内容を充実させ、会員の皆様はもちろん、多くの方々に古代アメリカの情報を広げたいと考えています。以下の要領で皆様からの原稿を募集しますので、特に若い会員の皆様には、ぜひ積極的にご投稿くださいますようお願いいたします。

◎内容

○エッセイ、論考など

特にジャンルは設定しないが、古代アメリカ学会の会報記事としてふさわしいテーマ。

○調査・研究の通信

最近行った調査、研究、関心等に関する紹介。
会誌『古代アメリカ』には投稿しないような簡易の情報も可。

○新刊紹介

古代アメリカ関連新刊書籍の紹介。

○その他

会員にとって有益な学術情報。

◎形式

○原稿字数は、写真・図版を含めて4000字(会報2ページ分)以内とします。

○原稿はワードファイルで作成してください。その他のファイルについては、会報担当委員まで事前にご相談ください。

◎掲載

○掲載に当たっては、会報担当委員から内容についての問い合わせや修正等のご相談をすることがあります。また、投稿原稿が多数の場合は当該号では掲載されないこともあります。掲載の可否については、事務局にご一任ください。

○投稿原稿以外に、会報担当委員から依頼した原稿も掲載する予定です。

◎投稿先・締切

○運営委員(会報) 福原弘識宛に、添付ファイルの形でメールにて送信してください。

送付先アドレス [REDACTED]

(会誌とは異なるのでご注意ください)

○投稿締切 11月15日(日)

○発行予定 1月上旬

4. 会費納入のお願い

会費が未納となっている方は、先にお送りいたしました振込用紙を使用してお振込みいただくか、または以下の口座に直接お振込み下さい。古代アメリカ学会は会員の皆様の年会費で運営されております。ご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。なお2年度分以上、会費が未納となっている会員につきましては、会誌・会報の発送を見合わせております。

ゆうちょ銀行

口座番号: 00180-1-358812

加入者名: 古代アメリカ学会

みずほ銀行山形支店

口座番号: 1211948(普)

口座名義: 古代アメリカ学会

5. 会誌バックナンバー販売のお知らせ

『古代アメリカ』のバックナンバーを1冊2,000円(会員価格)で販売しております。購入をご希望の方は、ご希望の号数、冊数を古代アメリカ学会事務局までお知らせ下さい。会誌と振込用紙をお送りいたします。なお、第3号は品切れとなっております。また他に残部希少の号もございますので、品切れの際はご容赦下さい。

(事務局からのお願い)

現在、古代アメリカ学会では、学会とかわる諸情報の連絡、および周知にメールを多用しております。

<編集後記>

古代アメリカ学会20周年とともに、会報も第40号を迎えることができました。今号では記念号として2本の特集を組みました。特集「学会20周年を振り返って」では、本会創立当初の日本での研究状況やそれを受けた本会創立の経緯など、多くの方々のご尽力があつて、現在の研究環境が整えられたことを痛感しました。特集「世界遺産の現在」では、考古学的な研究対象としてだけではなく、現代的な価値とそれを取り巻く状況について考察する7本の寄稿を掲載しました。多くの会員の皆様のおかげで、充実した紙面にすることができました。

今号でこの2人での編集が最後となりました。会報編集を通して、3年半多くのことを学ばせていただきました。応援してくださった会員の方々にもお礼申し上げます。ありがとうございました。(中川)

まだ学会にメールアドレスを登録されていない方や、学会からメール連絡が届いていないという方がおられましたら、学会事務局までご連絡いただけますよう、ご協力をお願いいたします。すでにご登録いただいている方も、メールが返送されてくる場合がございますので、当学会事務局のアドレスからのメールが受信可能となるよう、設定をお願いします。特にGmailなどのフリーメールをご利用の方は、事務局からのメールが迷惑メールとして処理されないよう、学会事務局アドレスを登録するか、迷惑メール対象から解除する手続きを行ってください。

一つの節目となる会報第40号記念号が完成しました。寄稿者の皆様のおかげで、記念号にふさわしい充実した紙面となりました。

私達、会報編集担当コンビは3年半にわたり、合計8本の学会報に携らせていただきましたが、このコンビにとっても本号は節目となりました。次号からは新しい役員が会報編集を担当します。これまで本会報を支えてくださった会員の皆様へ感謝を捧げたいと思います。ありがとうございます。(福原)

発行 古代アメリカ学会
発行日 2016年7月15日
編集 古代アメリカ学会 会報担当：福原 弘識
中川 渚
古代アメリカ学会事務局
〒990-8560
山形県山形市小白川町1-4-12
山形大学人文学部
E-mail : jssaa@sa.rwx.jp
郵便振替口座 : 00180-1-358812
ウェブサイト URL http://jssaa.rwx.jp/